



第 24 号
2000 年 10 月

ネパリ・バザーロ だより



ベルダレルネーヨ通信

ネパリ・バザーロは、ネパールを中心としたアジア諸国のハンディクラフト製品や食品の企画、開発を行い、継続的に輸入を続けることによって就業の場の拡大をめざすフェアトレード団体です。立場の弱い人々、女性、子どもの自立を支援し、貧困の課題改善に取り組めたらというのが私たちの願いです。母体となるボランティア・グループ(NGO)であるベルダレルネーヨ(ネパールの女性の自立と子どもの育成支援の会)のトレード部門として1992年から活動しています。1998年2月からは、地球市民かながわプラザに直営店「ベルダ」をオープンして第三世界からの品々をご紹介します。

フェアトレード 活動紹介 ニュース・レター



ネパリ・バザーロは、IFATに所属して、国際的な協力を得ながら、フェアトレード運動を通じて社会貢献を目指しています。

IFATは、ILO(国際労働機関)の正式なオブザーバの認定を受けたフェアトレードの国際組織です。



特集

フェアトレードの現場とその思いシリーズ その4		
① 遠隔地事情	- コーヒーの活動を通してみたネパール -	p. 2
	村の自立への歩み 土屋完二	p. 9
生産者を訪ねてシリーズ その11		
② ケバ シュー・ルテニカスクール	苦難の歴史を乗り越えて 土屋春代	p. 6
セミナー報告「ネパールの医療とフェアトレードの現場から」		㊦ 矢島万知子... p. 12
ネパール訪問記 魚谷早苗、栗田利都子、高橋純子、長尾邦子、長尾美欧...		p. 13
海外の動き ネパールの新聞から		 p. 14
料理教室「新マサラによるネパールカレー」		島津直子... p. 14
学習会「チョコレートゲーム」		㊦ 藤本芳子... p. 15
お知らせ・編集後記		p. 16

表紙絵:「ネパールの村風景」ラジュ・ムニ・バジュラチャーリヤさん画



遠隔地事情

- コーヒーの活動を通してみたネパール -
村の自立への歩み

土屋 完二

ネパリ・バザー口の歴史を語るとしたら、この話をしなければウソ、というほどに密接な関係をもった活動のひとつにコーヒーがあります。

コーヒーは、紅茶と同様に一国の換金作物としての立場もあり、ネパール政府レベルでの活動の必要性和その限界や、私たち草の根レベルでなければできない活動の必要性をこれだけ鮮明に写し出したものものないのではないかなと思うからです。単なるコーヒーだけでは語りきれないほど多くの物語があり、これひとつとっても、フェアトレードが何故必要か、多くのことを教えてくれます。

ネパールでのコーヒー輸出許可第1号

フェアトレードの目的に、小さな生産者への貢献、社会的に不利益を被りやすい立場への貢献があります。その大きなキーワードが女性であることは間違いない事実です。その思いをもってハンディクラフトを中心に企画、開発に取り組む中、コーヒーの販売市場がなく困っている、という出会いがあり、1994年秋にコーヒーの取り引きは始まりしました。

当時、政府レベルでは、いろいろな国へ取り引きをして欲しい旨、打診を行い、その中で唯一オランダだけが取り引きをすると意思表示しました。オランダは国レベルとして、私たちは、草の根レベルとして取り引きを開始したのです。そして、正規の輸出許可を政府から受け輸出を始めたのは、ネパリ・バザー口が第1号でした。



輸出許可第1号



グルミ地域のモジュワにて、当時の現状と今後についての話し合い。ゴータム氏(中央)、完二(その右)、バルシュラム氏(右端)、ここへ至る途中は46度という猛暑。インドでは、死者が続出した。

コーヒーの取り引き中止の決意

私達有志で調査隊を組織して村へ何度か訪問したこともありましたが、せっかく村人とも良い関係を築こうと努力していたのですが、しかし、なかなか全体がみえてこない。一体、どのくらい農民に支払われ、運搬にいくらかかるのか。私たちと村を橋渡している人達が教えてくれないのです。村人に直接聞いた話とも違います。村と私たちを仲介している人に情報公開を迫りましたが、すべて情報は隠されたまま。これと平行して、もちろん、他からの情報収集にも努めました。そして、スタッフと何度も相談し、その取り引きは「相互信頼が得られない」ので止めざるを得ないと決断しました。

コーヒーの輸入継続、最後の望み

せっかく始めた村へのコーヒー支援でしたが、農民への情報が不透明であったため、先の活動は断念。その間、輸入を止めるべきか、継続の努力をすべきか、という議論をスタッフ間で話合ってきました。日本でも応援して下さる多くの方がいます。ハンディクラフトの販売が一時できないほど時間を割き、日本各地をキャラバンしてコーヒーの取り扱いをお願いして来ました。その協力を惜しまなかったお店の方やグループの方々の思いも考えて判断したいと思いました。その好意をいかさなくては。せっかく広げた市場をたたむのは、生産者にとっても残念な

ネパールのコーヒーの歴史

ネパールで初めてコーヒーが栽培されたのは1944年頃のことです。インドから持ち込まれたアラビカ種の種を、ルンビニ地方のグルミ地区のアンプチャル村の2~3人の農夫が植えたのが始まりです。その後何年もしてコーヒー栽培が、やっとグルミ地区農業開発銀行の融資を受けられるようになって、小さな苗場も作られ広く栽培されるようになりました。最近では、ネパールの各地で栽培がされるようになり、中でもバルバ・バグルン・ゴルカ・チトワン・ジャバ・イラム・ミヤグディなど15カ所以上になり、特にバルバはコーヒーの生産が盛んになっています。注) 2000年1月現在ではグルミがもっとも盛んです。(紅茶コーヒー委員会資料による)

グルミ共同組合長のハリー・ゴータム氏のメッセージ

ネパールのコーヒーの歴史は大変浅く、30年前に東ネパールのグルミで植えられたアラビカ・コーヒーが最初です。当初、農民達は、コーヒーは使用できない余った土地を使用していました。以来、換金作物として広がってきたのです。大変奥地でもあるので、化学肥料は使用していません。殆どの農民は、牛糞を肥料として使用しています。また、政府もコーヒー生産を推奨したので、今では質の高いコーヒーが採れるようになっています。

約3年前に、ネパリ・バザー口の完二さんがグルミを訪れ、3年間の購入協定を結んでくれました。その頃は、市場がなく、農民は木を切らねばなりませんが、いまでは継続的にコーヒーを売り、収入を得ることができ、大変に感謝しています。

そのお陰で、アルグカンチ、バグルンなどでもコーヒーの木を植えています。



ことですが、消費者の方、お店の方々にとっても残念なことです。なぜなら、一方で、まだまだ市場がみつからず困っている人々がいるのです。しかし、その生産者となつながらには、だれも仲介はしてくれません。極わずかの情報を頼りに自ら奥地の家々を訪問しなければなりません。時間も労力もおおいそうかかります。精神的にも、費用的にもギリギリまで追いつめられていましたが、最後の望みをかけて、もう一度、挑戦することになりました。

コーヒー情報集めに奔走

ともかくも、より正確な情報を得ようと、紅茶コーヒー委員会(National Tea & Coffee Development Board)と情報交換したり、ボカラの農業関係のNGO LI-BIRDを訪ねたり、またネパール商工会議所(NCCI)の農産物事業センター(Agro Enterprise Center)を訪ねたり、主だった生産者、協会を訪ね、更に、ネパールにある日本の国際協力事業団(JICA)を訪ねました。新聞に情報を集める記事を書いたりもしました。紅茶でお付き合いのあるディリーさん、ハンディクラフトのサナのチャンドラさん、カーゴのディリーさん、多くの方に支えられ、協力して頂きました。

私たちの存在を知ると、商談を持ちかけてくる人々もいました。いわゆるミドルマンです。換金作物を売りたいという村人と、その中間にたつて名をあげ、または儲けようとするミドルマンの動きは、残念ながら将来のことを何も考えてないし、また、村の状況がみえて来ないという意味では、先に取り引きを中止せざるを得なかった事情となら変わりなく、大変困りました。もちろん、妨害もあります。

今まで築いてきたネットワークをたよりに、現在の状況の情報集めに奔走する中で信頼できたのが、NCF(National Cooperative Federation of Nepal)という組織で、そこを通じての輸入継続を検討しました。問題は、農産物は得意なのですが、コーヒーは扱い実績が少なく、イニシアティブの実行力が当時はなかったのです。それでも、村への連絡ルートを組織的に保有しているので、その力をかりて、調査は始まりました。



ボカラの静かな一角にある
LI-BIRDの事務所

カトマンズ郊外、キルティブルにある果物の開発研究を行うJICAの施設。
当時、コーヒーと紅茶部門もあった。

イニシアティブ不在、場当たりの政策

コーヒーのように、作物を作ることはできても、それを毎年増産するのか、市場は国内向けか海外か、品質や流通ルートはどうしなければならないか、適正価格はどのくらいかなど、全体をみながら促進するイニシアティブをだれかがとらなければ、生産過剰や市場喪失という問題が必ず発生し、最終的には農家への打撃という結果をもたらします。残念なことに、当時の紅茶コーヒー委員会は、基本的には市場を長期的にみて海外市場も考慮しながら育成しようとする力はまだありませんでした。

委員会を構成する理事は、生産者として各村の代表者とそれを取り扱う販売者(多くの場合、ミドルマンに該当)そして、その委員会職員で構成され、市場というものを反映していないかったのです。市場なき計画は、絵に画いた餅。そこに、私たちが登場し、現在の状況や今後の動き、市場の動き、品質などを情報交換しました。実際には、ミドルマンと、それに繋がった大地主の生産者の力が大きく、聞く耳もたずの状態、私たちが市場拡大に努めれば、その分、需要があるのだからと値段を単純に上げる、という図式でした。もちろん、それに加えて、私たちが、市場がない地域の調査へ入ると、

ネパールのコーヒー生産量

1997/1998のデータでは、パルパが一番の収穫、その次がグルミであるが、2000年発表では、グルミが一番の収穫量になっている。ネパールのバザー口での輸入量は、チェリー換算で年間約30トン。

注)チェリー: コーヒーの実。実際に使用されるのは、その中の豆で、グリーン・ビーンズという。質の良い豆は、チェリーの重さの30%相当。

パルパ: 15トン

グルミ: 13トン

アルガカンチ: 12トン

バグルン: 5トン

ラリトプル: 5トン

その他は、1トン以下が11地域。(1997/1998年度)

農民は何故苦しい生活なのか。

(基本作物である米の収穫量で計算)

小作人の年間の収穫量

4ラーク(27,456 m²)の借地料=640,000円/年
利子10%: 64,000円

米の収穫量: 2,400Kg 地主へ半分の1,200Kg 収める。

米を育成した経費支払: 48,000円

(精米: 1,200Kg → 600Kg)

米を販売すると、400円/kgなので、

収入=1,200kg*400/kg=480,000円

赤字: 752,000円 - 480,000円 = 272,000円

(6-7年前までは、3200kg 収穫)

コーヒーは、不毛土地が使えるので、この赤字を補い、生産性の高い農産物として期待されている。

グルミの小高い丘から遠くボカラ方面を眺めると、ダウラギリ、そしてかすかにマチャブチャレの山々が見える

農業開発センターのビムさんと、周辺の家々を訪問して、コーヒー収穫の様子を視察



それを聞きつけて必ずミドルマンが出現します。一時的に価格をつり上げ、お金儲けをするためです。将来ビジョンのないこのような動きは、明日どうなるかもしれませんが、不安定で、妨害以外のなにものでもありません。

村との直接取引の開始

このような動きは、私たちが最終的には購入するだろうと見込んでの動きです。長期的に全体がみえていない村人は、この動きには弱いのです。少しでも高く売れた方が、その時点では良いのですから。貧しい地域へ行くほどこの傾向は顕著です。

しかし、このようにして異常に高くなったコーヒーの価格は、世界市場価格からかけ離れて、長期的には競合力がなく、市場を失います。その対策も考えました。例えば、コスタリカ（中米）のフェアトレード組織からもコーヒー豆の取り扱い打診を受けていたので、そこから応援してもらってブレンドで乗りきる案。味も近いインドのコーヒーとブレンドする案。いろいろ考えてみましたが、ネパールにこだわる私たちは、できるかぎりネパールコーヒーでがんばってみようと思いました。その対応として、村との直接取引を始めることにし、連絡

場所としてカトマンズ事務所の設置をしました。

直接取引は、グルミの村から

直接取引を行うことになった最初の村は、グルミという、ネパールで初めてコーヒーを植えたとされる地域の村です。首都カトマンズからは車でも2日かかる山深いところです。ここも、市場がまったくなく困っていたのです。輸入継続か否かの運命をかけて、カトマンズからローカルの夜行バスで1日、そして、そこからジープを借りて1日かけてグルミを訪ね、調査の旅が始まりました。

当時の模様は、P10、P11(通信17号より抜粋)の「生産者を訪ねて」をあわせてお読み下さい。

グルミの状況調査

実際には、この調査の旅を初めとして、以後、再三足を運ぶことになりました。その間、コーヒーに関係している販売者も訪ね、コーヒーの状況、市場価格を調べる旅もして来ました。その結果からも、信頼できるのは、直接取引以外にはないと判断しました。だれ一人として、ネパールの将来を考えて行動している人に出会うことはなかったからです。

グルミで初めて訪ねたのはパラタクサルという山の小さな町です。ここで農家を訪ねながら、コーヒーの様子をみてまわりました。いったん帰国して次に訪問し



モジュワへ行く道は、低地のため、いたるところ泥濘

途中、このように崖で細い道もある。大きな石で動きが取れない（帰り道では、バスが落ちて道を塞いでいた）

ネバリ・バザー口取組の歴史

- 1994年9月 ネパールよりコーヒーを正式に輸入（以後、ボランティアが村訪問数回）
- 1996年5月 コーヒー調査に各地域を訪問
- 1997年2月 グルミ地域のパラタクサルを状況調査で訪問
- 1998年6月 グルミ地域のモジュワを訪問、今後の協力関係を話し合う。合わせてパルパ、モダンボカラ地域も調査訪問
- 1998年6月 オーストラリア(NASAA)のオーガニック証明機関、グルミ調査
- 1998年8月 海外青年協力隊ネパール会と事務局へ情報収集の協力依頼する
- 1999年3月 グルミとの直接取引協定を結ぶ
- 2000年1月 ピラトナガル、ジャバ、イラム調査、共同組織を作る打合せ
- 2000年1月 コーヒー皮むき機設置
- 2000年4月 ジョハン村訪問（コーヒー状況確認）
- 2000年8月 有機証明、国内市場の創造、国際市場に通用する価格への取組体制討議



たのは、グルミの麓の村、モジュワという電気も来ていない村で、その地域の実力者というゴータムさんと会話し、お互いの見解を話し合いました。この時は、カトマンズからランドクルーザーで2日かけて飛ばして行きました。マオイストという極左グループが出没して危険という地域に大変近く、運転手が恐がって先へ入ろうとしないなど、緊張の続く旅でした。5月ということもあり、大変暑く、途中40度を超す旅のはてに到着。体中蚊に刺された湿気と暑さの旅でもありました。そこから徒歩で半日。彼に会うことができたのは、伝令をそこから走らせて翌日の朝でした。白馬に乗って現れたその姿は星の王子様さながらでした。遠方から馬で2時間、徒歩であれば8時間かかるとのことでした。

裸足の母子への思い

彼との連絡を取る間、小さなバザール通りでぼんやり外を眺めていると、幼稚園児ぐらいの女の子と小学校低学年ぐらいに見える女の子とそのお母さんが、皆裸足で近くのお店に立ちよっては水をおねだりしたり、何かをもらったりして家路につく姿が目に入りました。こんな奥深い村の中でもこのような情景を見るなんて。カーストが低いからなのか、ともかくも家計は苦しいのでしょうか。いつか、コーヒーを通じてもっとこの村に関われるようになったら、もっと状況もわかるでしょう。そして、そのような人々にまで効果が行きわたるように願わずにはいられませんでした。

取引協定、有機検査とコーヒー皮むき機設置

翌年、再度、バラタクサルを訪ね、協定を結び、その年の秋に、オーストラリアのオーガニック証明機関から試験官を招き、グルミを訪ねて土壌検査を行いました。現金がより多く村に落ちるには、そしてチェリーのまま運ぶより豆にした方が軽いので運搬も効率が良い、ミドルマンの妨害も受けにくいなどの理由もあり、コーヒー豆の皮むき機の導入をネパール政府に働きかけ、村に皮むきセンターを作りました。

ジョハン村の田植えの様子



モジュワの手前のジョハン村、電気が通じている最後の村。ここに皮むき機が設置できた。



事務机の上壁には、何と完二の名前が書かれていた。



•जुवा, इल, [K]fj/fNB*,
f/fp/[f*, I-0*, E, U, 1/2 P]y* [f/wa
d, 7, 0, C, U, 1/2 B



コーヒーの育て方トレーニングの終了式。



更にカトマンズでも、コーヒーの品質選別を行って、品質の向上に取り組むとともに、女性への仕事の機会も作りしました。グルミからカトマンズまで運ぶ流通ルートを構築するのも苦労の一つでした。

西ネパールの換金作物にコーヒー

ネパールにおけるコーヒーへの私たちの貢献は大きく、ネパール商工会議所がまとめて発表している輸出実績の数値は、私たちが扱った数値です。つまり、ネパールで---

続く：P 9 < 将来の展望へ >

コーヒーの生産地（ネバリ・バザールの関係）

カトマンズ



イラム

グルミ



クンベシュワール・テクニカルスクール (KTS)

— 苦難の歴史を乗り越えて —

土屋 春代

祭りの夜

パタンの王宮広場の端にクンベシュワールというヒンズー教の寺がある。

8月の満月の夜、9つの伝統楽器を演奏しながらシヴァ神を担いで町内を練り歩き、最後にゴサイクンダという聖なる池の水が流れ来ていると伝えられる寺の池に安置するジャナイ・プルニマという祭りがある。

今年の8月、ネパリ・バザーロのボランティアメンバー5人が生産者訪問と新しく取組むプロジェクトの打合せのためネパールに来ていた。KTSの事務局長キランさん(47才)はとても喜び、クンベシュワール寺院の祭り見物に招待して下さった。夕食をいただいた後、隣の寺院に皆で繰り出した。

テンポのとてもゆるやかなその祭りがクライマックスを迎えるまで痺れを切らしながらみつめ、やや疲れの見えるメンバー、深夜になり雨も降りそうな気配に、そろそろ帰ろうかと思ひ始め、隣のキランさんを見ると、毎年見慣れているであろう祭りを、私たちが満足するまでいつまでも付き合いますよ、というように穏やかな表情で微笑を浮かべながら付んでいた。

KTSのこれまでの厳しい道のりを思うとキランさんの暖かく穏やかな人柄の底に、普段は隠されている芯の強さを感じる。そしていつも家族の結束の強さに感心し、その要であり、尊敬を一身に集めているキランさんの父親シディ・バハドゥールさんの存在の大きさに気付かされる。



KTSは、パタンの一角、古い歴史のある町並みの住宅街にある。比較的貧しい人々が住んでいる地域である。



KTSの事務所にて:

左から、校長のカルナさん、ネパリ代表の春代、事務局長のキランさん

シディ・バハドゥールさんの闘い

シディさん(74才)の社会活動歴は古く、それは権力との壮絶な闘いの歴史だった。

シディさんの祖父は70~80年前ネパールでも屈指の貿易業を営み裕福であった。しかしカーストは低く、貧しい人びとのことも良く理解でき世話をしたので、人々にとても慕われた。

お金と信望が集まったため、当時ネパールを支配していたラナ家に疎まれ、シディさんの叔父に当たる息子のひとりは、犯してもいない殺人の罪に問われ、50年ほど前、妻と7人の子どもを残して絞首刑になった。

青年だったシディさんは権力に対して強い怒りを覚え、政治活動に入ってしまった。

特に不可触民の人々の地位向上を図り、政権から危険視され、1951年ラナ家が倒れるまでの5年間を牢獄で暮らした。

1955年、国王により国会議員に選ばれた。

その後も地域での様々な社会活動を精力的に続け、今もご健在だ。

シディさんは政治、社会活動の傍ら45年前、有機肥料の工場も作った。有機栽培という言葉は今でもネパールでは耳慣れない。当時はまして誰も知らず、使う人も殆どいないという状況だったが、ネパールの農業の将来に有機肥料は必要だとの信念に基づき利益の上がらぬその工場を運営し続けた。鶏肉の需要が増え、その飼料に混ぜると良いということが理解されて養鶏業者に売れるようになり、やっと10年くらい前から採算が取れるようになったという。今でも彼の工場がネパールで唯一の有機肥料製造工場だ。

いくら国のためとは言え、これほど長い年月採算を度外視し、所有していた土地を次々と売ってまで続け、しかも家族が一団となって支える、その揺るぎ無き信念、強い結束力はどうやって、どこからうまれるのだろうか? KTSの歴史を聞いて、理解できるような気がした。



シディさんが、当時の社会貢献を国王から認められ、議員に抜擢された時の記念写真

K T S の歴史と活動

クンベシュワール・テクニカルスクール (K T S) の歴史は、1983年、シディさんが地域に住むボデという道路清掃夫カーストの子どもたちのためのデイクアセンターを開始したことに遡る。

ボデというカーストは不可触民と言われ、最下層に位置する。カーストの高い人々の家のある、町の中心部に住む事は許されず、町の外れの斜面に追いやられ、バグマティ川の土手にある火葬場近くに住んでいた。

彼等の住むところは、死、腐敗、汚物を象徴していた。彼等は、葬式、排泄物の処理、屠殺、更に死刑執行など汚れた仕事を引き受けることを命じられ、仕事を変わすることは事実上不可能であり、しかも何の生産手段、技術も持たなかった。

当時彼らは殆どの食料をゴミの中から拾ってきては食べていた。においがすごいので、しばらく乾燥させては食べていた。小さなあばら家に住み、寝床の下はゴミが溢れ、ブタやアヒルがいて、臭気がひどく不衛生であった。服も拾ったものを着ていて汚く、30才から35才まで生きられたら良い方で、子どもたちは極度の栄養失調だった。

シディさんはセンターをスタートしたが、ボデは不可触民のため、だれも手伝おうとしなかった。彼の娘5人、息子2人の家族だけで世話をした。やがて娘たちの友人が1人、2人と手伝うようになった。デイクアセンターはスタート時、場所がなく寺の中で始めたが、使用許可がもらえず、トラブルが絶えなかった。

オープン2週間後、子どもたちが突然来なくなった。調べると親たちが清潔の大切さ、健康の大切さを知らず、子どもたちを行かせる努力をしなかったのだと分り、親も含めた教育の大切さに気付き、7、8才から大人まで全員に読み書き、清潔の大切さ、人として皆平等であることを教えた。

それまで、小さな子どもでも朝からお酒を飲むような荒れた生活だったが、身綺麗にし、家でご飯を作り、読み書きもできるようになった。

すると、近くのホテル経営者等は、彼らにお酒や食物を1Rsの物でも5Rsとだまして売っていたのがだませな

くなり、とても怒っていやがらせをした。警察を操って、デイクアセンターを開めさせようともした。

様々な妨害にも負けず、デイクアセンターを続け、小学校も開設し、さらに地域を綺麗にする活動も始めた。

その後、何をしようかと悩み、彼等の収入は月々約120円ぐらいと非常に低かったので、良い収入を目指して仕事のトレーニングをしようと考えた。

カーペット産業が盛んになってきた時だったので肥料工場の1階に機織り部屋を作り1985年カーペット織りのトレーニングを始めた。15才以上の男女5、60人ぐらいに教えた。1986年編物のトレーニングをスタートし、1987年から家具作りのトレーニングも始めた。そしてボデだけでなく他の低カーストの貧しい人々にもトレーニングを開始した。

技術訓練生には、カーペットで1日20Rs、家具は、1ヶ月700Rs支払う。支払う理由は、彼らがあまりにも貧しく、お金がなくて食べることもできないとトレーニングに通う事もできないから。

編物は、貧しい人には無料、いくらか余裕がある人からは月に150Rs徴収する、しかし、毛糸、教科書は全て無料で配布する。

現在のトレーニングセンターのビルも1994年に支援を受けて建設された。

1989年まで、生徒は清掃夫の子どもたちのみであったが、1990年から、学費の掛からないことや教育内容の良さがスクールデイの公開などで知られるようになり、他のカーストの貧しい子どもたちも通学するようになった。

1991年まで、毎日、スタッフがコミュニティーに行って、学校へ来なさいと呼びに行っていた。

K T S は自分たちの利益のために学校に来いと言っていると両親は誤解し、積極的に子どもを通わせようとしなかった。そこで、それは違う、あなたたちの子どもが



居間で歓談しながら、K T S の長い歴史を興味深く伺う。その話は、3時間半にも及んだ。

カルナさん(左端) シディさん(左から2番目) キランさん(右から2人目) 春代(右端)



良い大人になるためだから、子どもに良い教育をしたい人は学校によしなさい、そう思わなければ来なくても良い、もう、迎えには来ない、と言った。

その後、彼らは教育の必要性を認識し、彼ら自身のインシアティブで子どもを学校に通わせるようになった。現在は、皆、教育の必要性を理解し、全員来るようになった。

今でも240名の50%が道路清掃夫の子どもで、他の50%は低いカーストの子どもである。

以前は費用は全て無料であったが、1991年35Rs、1993年50Rs、1994年にも少し上げて、現在の年間100～150Rsだけ払ってもらうようになった。まったく無料だと、却って学校に来なくなるという。

他にも行き場のない子どもの宿舎を運営し、10人の女の子、11人の男の子の世話をしている。その内5人はK T Sの小学校に通い、16人の子供は外の学校に通っている。彼等に掛かる全ての費用はK T Sで出している。

K T Sとネバリ・バザーロの関わり方

K T Sとは95年からの付き合いだが、これまでに意見の違いがいくつかあった。

ネパール特有の太い糸でざっくり編んだセーターは、素朴で味があるがとても重くかさばる。年々暖冬傾向で、軽くて暖かく、カラフルな素材の防寒衣料が出まわる日本の市場では売れなくなるのは目に見えていた。

細い糸で軽いセーターを編んでくださいと頼んでも、ニッターさんが編むのに時間が掛かるからいやがると難色を示した。価格の設定にしても一般の倍の価格で、何故これほど高くなるのかと聞くと、子どもたちのケアや活動にお金が掛かるので維持するには製品価格を高くしなければならない、と言う。それは活動を支えることを主に考えたチャリティー価格であり、あまりに高い原価ではいくら利益をギリギリに押さえても販売価格が高くなってしまい、フェアトレードを理解して下さるお客様にしても買いきれない。

適正な市場価格でなければ継続できない。見解の相違や価格が折り合わなかったことから、ウール製品のオーダーは他の生産者団体に移さざるを得なかった。

その後、キランさんから、軽いセーターを編むようにしました、価格も他の生産者と同じように設定しましたから注文をください、と声が掛かった。すでに他の団体をメインに取引していたのでたくさんの注文を出す事は



手編みをする女性たち

できなかったが、要望をきちんと聞き入れて努力してくれたことにあって、新たなデザインを考えオーダーした。

学習室で勉強する子どもたち



今では軽い糸に慣れたニッターさんたちは、重い糸は肩が凝り、疲れるからいやだと言うそう。『なんでも最初は皆いやがるけれど、慣れれば大丈夫。軽いセーターを編むようになってから注文がとて増えましたよ。』このキランさんの言葉を聞いた時、どれほどうれしかったか。

そして、信頼関係も深まり、キランさんや家族の方達には、仕事を離れても友人としてお付き合い頂いている。

ネバリ・バザーロの目指すフェアトレードとは

94年からサナやマハグティなどの団体とF T G Nというフェアトレード団体のネットワークを作り、I F A T（南北のフェアトレード団体の国際連盟）のアジア地域会議をカトマンズで開催したり、イタリアで開かれた世界会議に出席するなど活発に動き、取引先も増え、経営も安定してきた。施設も充実し、インターネットも駆使して、これから益々発展して行くだろう。ずっとお付き合いしてきたところが大きくなるのはとてもうれしい。

大きいとは言っても、ネパールの生産者団体は、インドや他の国の団体から見るとまだまだ小さいが、インターネットはおろかF A Xすらない小さな小さな生産者が更にたくさん存在する。電話が辛うじてあっても英語が話せず、海外との取引はできない。

国内市場が未発達で国外に販路を求めなければならない手工芸生産者の現状を考えると、ネバリ・バザーロは力の付いてきた生産者から、そういう小さな生産者に取引を移していきたいと考えている。

英語の堪能なスタッフが揃い、施設や道具も充実している団体と付き合いれば日本の市場拡大に殆どのエネルギーを投入できて売上も増え、組織もどんどん大きくなるだろう。

でも大きくなればなるほど、ますます小さな生産者とは付き合いず距離が開いてしまうだろう。

フェアトレードも一様ではなく、付き合う生産者のサイズに合わせて考え方も対応も違うはずだ。

小さな生産者と付き合うことは楽ではない。しかし、I F A T参加団体の規模がだんだん大きくなるのを見るにつれ、ネバリ・バザーロの目指すフェアトレードは、そういう組織に入ることのできない、より小さな生産者と付き合うことだな、とつくづく思う。

注) Rs(ルピー): ネパールの貨幣単位: 1Rs=1.7円



---> P 5からの続き 輸出されているコーヒーは全て私たちが扱っている数量で、それは、日本の貿易白書に記載されているネパールからの輸入量そのものです。それでも、私たちの存在はネパールの関係者には認識されていませんでした。昨年、ネパールの大手英字新聞、「The Rising Sun」に私たちの活動が紹介されて以来、私たちへの活動の評価も高まりつつあります。

グルミの地域と直接取引の協定を結び、かつ、今日に至る取引の実績がネパール政府（実際の窓口は、NCCI（ネパール商工会議所）の農業事業センター）に評価されています。ネパール政府は、東ネパールでは紅茶に力を入れる政策、西ネパールでは、コーヒーをその育成対象として取り組む方針でいます。つまり、充分ではないにしろ、技術指導やそのトレーニング費用を優先して投下してもらえるのです。グルミの村にコーヒー豆の皮むき機が設置できたのもこの方針に従い、ネパール政府（農業省）から資金が提供されました。つまり、私たちの税金、政府間資金援助が有効に使われたことを意味しています。ここに至るには、海外青年協力隊ネパール会にも応援を頂きました。

将来の展望

このような苦労を通して、ネパールコーヒーが村から町へ、そして日本の市場へと運ばれるようになりました。現在は、このグルミとイラムの地域が中心です。年々生産量も上がるので、海外の市場にも通用するようにオーガニック証明を取得することや、一般市場よりも大変高くなった価格を市場に通用する価格まで下げる、市場に通用する品質を確保すること、海外には出せない豆は、国内市場にまわせる工夫をしていくこと、海のないネパールとして輸送コスト削減の方法を考えることなど、まだまだやらなければならないことが沢山あります。

ネパールへ行くたびに、生産量とそれに見合う政策の必要性を訴えています。それぞれの思惑がからみうまく機能しないのが実態です。技術的向上の面では、今後、国際協力事業団への協力要請や資金面での協力なども仰がなければとても手が負えないでしょう。でも、まずは彼ら自身がそのつもりにならなければ意味がありません。今、その戦いは始まっています。



紅茶コーヒー委員会での情報交換会
左端が、ネパールのネパール事務所のラビンさん、左から3番目がオーガニック紅茶(KTE)のディリーさん、その右がネパール1番の紅茶の専門家スッパさん、そして完二、右端は、委員会代表のエムアル・シャルマさん。

ネパール・ヒマラヤ紅茶生産者協会(HOTPA)のディリーさんからの一言

ネパールは、その変化に富む気候と地形により、品質の良い紅茶、コーヒー、スパイス、果物などの生産に大変適しています。問題は市場を見つける力がないことです。通常、そのような産物は、遠く離れた小さな農家で自然に従った農法で作られています。

もし、ネパールの産物が適切な市場に提供できるのであれば、貧しさはそれほど問題にはならないでしょう。

フェアトレード組織であるネバリ・バザーロは、何年もの間、生産者グループから直接に、手工芸品、紅茶、コーヒーを購入し続けています。

そのネバリ・バザーロの努力は、農村部の雇用創出というだけでなく、ヒマラヤの環境を守るという意味でも大変に意義あることです。

外国からの援助は、このネパールではあまり効果が得られていません。厳しくいえば、寄付は農村部にまでは及んでいないからです。

農村部の輸出可能な産物を作る小さな生産者の市場を広げ、ことは、経済的にも、社会的、文化的向上にも繋がります。ネパールの基本的な要求は、援助ではなく貿易なのです。

日本の皆さんが、これら小さな生産者の作った新鮮でエキゾチックな嗜好品を飲んで、彼らの生活の維持と美しいヒマラヤの環境を保護していることに深く感謝いたします。

コーヒーの最近の動き

●最近のコーヒーを巡る動きは速い。

ネバリ・バザーロが継続して輸入した実績をネパール農業省が注目しているからだ。今年の8月中旬には、ネパールテレビでも、グルミ地域が紹介された。

東の地域は、紅茶により豊かであるが、西は経済的に貧しい。その厳しい生活への不満が蓄積して、反政府的な行動も顕著になっている。その解消に向けて、政府はいろいろと換金作物の促進を図るがうまく行かない。その中で、このコーヒーは成功例に映るようだ。

今後は、ネバリ・バザーロがオーストラリアのオーガニック証明試験官を自力で村に呼ぶ必要もなくなる。

村人自身が、政府機関と交渉したり、オーストラリア大使館の協力を得て証明を自分達で取るようになる動きがでてきたからだ。技術指導には、ドイツ政府系機関(PSP)も関心を寄せている。

あとは、ネパール国内市場をどう創造するかである。現在、インスタント・コーヒーに年間500万円以上の外貨を使っている。成功すれば外貨節約。大変国にも貢献する。高級ホテルを中心に美味しいコーヒーのニーズも高まっているので好期だ。ロースト・マシンとオーガニック技術。この成功が真のコーヒー政策の成功如何にかかっている。

官と民(草の根)が協力したからこそ達成できた。もうあと一歩、この努力を怠らないように続けたい。



コーヒーの支援活動の始まり 1998年6月通信17号から

生産者を訪ねて その6
共同組合組織のコーヒー村 グルミ
小規模農家の村人たち
土屋完二

新しい出会いを求めて

マーケットが見つけれず困っている農民の方々との出会いから始まったコーヒーの輸入であったが、そのころから数年が経った。まだまだ私達の力も弱く、前途多難である。それでも、そのやる気を支えてくれるものは、農民の方々やそのご家族、そして、それを支えて頑張っている方々との出会いである。今回は、ネパールでは比較的新しい形である組合組織を通じて、小規模な村のコーヒーの状況を知るために、グルミの村を訪ねた。



バザール・バザールにお住まいのビムさんとコーヒーの苗木

共同組織の繋がり
National Cooperative Federation
Center Cooperative Federation
Districts Cooperative Federation
Primary Cooperative Federation
(Gulmi, Pulpa, Japa)

夜行バスの旅

目的地は、かなり山の奥にある。首都カトマンズからは、西の方向で、距離は観光で有名なポカラよりやや遠いブットワールまでまず行かなければならない。車をチャーターするには、私の貧乏な旅では支払いに堪えなく、地元の方々が利用する夜行バスに乗ることにした。バスの切符はネパール語、数字もネパール文字。席は予約制なのだが、自分がどこに坐って良いかさっぱりわからない。窓は閉まらないし、座席の間隔も狭く窮屈で寒い。バスの中は、英語は聞こえない。何をしゃべっているのか、断片的にしか理解できない。途中のバス停から若い男性が乗ってきたかと思ったら、車掌とどなり始めた。後部座席からヤジが飛ぶ。どうもお金がないよう

で、払わなければ降りろと言っているらしい。そこを何とか乗せて欲しいと交渉しているようだ。

このようにして、夕方、カトマンズのニューロードを出発したバスは、翌朝5時に目的地に到着。外はまだ真っ暗であった。まずは、知り合いの家で休養をとらせてもらい、地元の案内の青年が来るのを待つことになった。

バスを諦めてランドクルーザーで

朝、日が昇るとすこぶる暑い。そうだ、ここはネパールでも南の端である。人々の顔つきも、ラマ族やチベット系の人々、またはネワールの人々のように、どちらかといえば日本人に近い顔立ちが目立ったカトマンズとは違い、インドを思わせるアーリヤ系の顔立ちが多い。服装からもインドの影響を感じる。短期滞在の私にとっては、あまりのんびりしているわけにはいかない。村の案内の青年が来たところで、これからの計画を打ち合わせする。

今回は、極力ローカルの交通機関を使いながら、とにかく歩くのを基本に計画したが、その計画はすぐさま変更を余儀なくされた。主要道路でバスを待つのだが、なかなか止ってくれない。これでは、時間がともかく無駄である。なんとかバスを捕まえて、近くの大きな町、ブットワールまで出て、そこでランドクルーザーを探すことにした。道がハードで、普通の車では走れないからだ。時間は、既に昼近くなってしまった。とほほ。夕方出発できればラッキーなほうかもしれないという状況になって来た。実際には、大変幸運にも1時間後に車をチャーターでき、出発することができたのだが。ポカラ方面に2時間ぐらい走り、タンセンの町で山側に入る。ここから数時間、更にガタガタ道を走り続ける。

日も暗くなって来たころグルミの村へ到着。あまりの揺れに、胃の調子が悪い。腹の調子も夜行バスのせいか調子が悪くなってしまった。

バザールのホテルで、お互いの夢を語り合う

村では、数人の若者が待っていてくれた。村の共同組織に所属している人達である。日も暮れて真っ暗になった夜道を、彼らの家を訪ね、挨拶を済ました。何故か子どもがまだ5ヶ月から8ヶ月の新婚の方が多かった。

家に着くと、赤ちゃんをチュウチュウと名める。可愛くて仕方がないのだ。

食べ物は大変に質素である。それでも、泊まれと誘われたが、トイレに弱い私は遠慮してしまった。明日は朝早く出発しなければならないので、一路、近くのバザールへ行き、ホテルに泊まる。2人が泊まれる部屋があり、二人で食事しても800円。おー安い！山の高いところなので、2月末にしては、大変寒い。具合が悪くて寝ていると、皆が心配して、食事とアルコール(ロキシ)を持って訪ねて来てくれた。この夜道を車で10分は走った遠いところからも来てくれたのには驚いた。

1

フェアトレードの現場とその思い

コーヒーの支援活動の始まり 1998年6月通信17号から

同じ部屋に泊まった案内の青年は、更に山の中へ行かねばならないところから来ている。彼は、村で暮らしたいという。だから、生活が成り立つのが彼の願いだそうだ。なかなか英語では通じない。村の方は、あまり英語ができない。

そこで、ネパール語をミックスする。いや、ネパール語に英語をミックスするという感じ。昨年の9月からネパリ・バザールスタッフから習い始めたネパール語が大変に役立つ。ロキンを飲みながら、お互いの夢を語りあう。

ダウラギリとアンナプルナの山脈を背景に

翌朝、村の案内役として農協のサブオフィスからビムさんが来てくれた。彼は、村の高校を卒業。そこで習った英語と、その後に独学で勉強した英語で私に話しかけてくる。読み書きや、長いフレーズで話すことはできないが、簡単な言い回しだと十分にお話ができる。大変な勉強家だ。

お茶を飲んで、車に乗りひとつ先のバザールまで行く。そこは、学校がすぐ前にある小さな街であったが、8,000m級の山々、雪化粧のダウラギリ、アンナプルナが良く見えて壮観である。昨晚、ホテルを訪ねてくれた青年がここに住んでいた。学校の先生をしているという連れ合いと、5ヶ月になるあかちゃんとの3人暮らし。バザールの角の小さな土間の一部屋に、質素なベッドがあり、簡単な料理をする器具が少し。それでも、私にベッドへ座るように薦めてくれ、村で飲むという自分達で作った村のコーヒーを出してくれた。

ここで休息した後、少し先まで行き、あとは歩いて山を下る。そこが、目的のコーヒープレイスである。

コーヒーとフェアトレード

以後、さまざまな出会いや、プランテーションでの新発見などがあった。その中でも、力を入れようとしているものは、換金作物である。コーヒーは、その中でも有力な作物。でも、なかなか安定したマーケットを見つけれない。特に、今年は、お隣のインドのコーヒー生産量が豊富なので、なおさらである。このような状況下で、一部の流通会社が市場の大半を握るコーヒー市場において、特に小規模生産者に対する私たちの取り組みは、力関係が対等故に歓迎されている。この持続可能な取引から、中長期的な村の開発を可能にし、生活向上につながって欲しいと願わずにはいられなかった。そして、ヒマラヤンワールドの香りを通じて、皆様に少しでもこの出会いをお伝えできたらと願いつつ。



グルミの農業開発センターに勤めるダディ・ギャワリーさんとそのご家族。ネパール語しか通じない村にあって、彼の通訳と説明は大変助かった。

ネパリ・バザール ネパール事務所スタッフ ラビン・マハラジャンさんからの一言

政府からの事業促進活動もあり、農民はコーヒーを植え、品質の良いコーヒーを作る努力をして来ましたが、残念ながら安定した販売市場は得られず、せっかく育てた木も刈らざるを得ない状況になっていました。

その頃、ネパリ・バザールがコーヒーを買い始め、農民にとって大変な助けになりました。

ネパリ・バザールが村から直接コーヒーを買い始めたので、農民にとって良い現金収入となり、農民への勇気づけとなっていますし、とても喜んでます。

ネパールでは、コーヒー作物はかなり奥地で生産されていて、その地域の農民の方々と連絡を取ったり、訪ねたりすることは大変難しい状況です。彼らのコーヒーを集めて、一時保管する村のコレクション・センターまで持ってくるだけでも数日を要します。

私達は、グルミの地域共同組合(DCV)と、コーヒーの提供と集荷についての協定を結んでいます。DCVは、農家からコーヒーの実を集め、皮むきをして、その中にあるコーヒー豆を、良い豆と悪い豆に選別します。そして、良い豆をカトマンズまで運んで来ます。

カトマンズまで運ぶと、私達で、更に良い豆と悪い豆を選別し、その後、日本へ送り出します。

私は、普段、コーヒー栽培の農民、協同組合(DCV)と連絡を取り合い、日本へコーヒーを送ったり、日々発生する新しい情報を日本とメール交換しながら仕事を進めています。

昨今、コーヒーを取り巻く状況はかなり改善されてきましたが、次の課題に向けて、ネパール人のひとりとして、ネパリ・バザールとともに改善に取り組んでいきたいと思えます。

「ネパールの医療とフェアトレードの現場から」 レポ： 矢島万知子

ひとりひとりの幸せを願って、ネパールの女性の自立を支援する活動をしている私達は、年2回、一般公開のセミナーを開催しています。

今回はネパールでの7年間の活動を終えられ、6月に帰国された木村雄二医師と奥様の知珂子さんをお迎えしました。

セミナーは木村医師ご夫妻の報告と、ネパリー・バザール代表の土屋春代さんとの意見交換というかたちで進められましたが、医療の面からの女性の厳しい状況のお話を受けて、医療とフェアトレードという異なる立場からの女性支援の問題や可能性について話し合われました。

予め申し込みのあった人数よりはるかに多い、60名以上の参加があり、セミナー開始直前まで私達は椅子を運ぶのに大忙しとなりました。お話の後の質問も、グループに分かれての話し合いも「時間が足りない。」という声がかかるほどの盛り上がりでした。

「今回で37回目、最後の帰国報告会」とおっしゃる木村医師は、病理医として出会った症例とその背景をスライドを使ってわかりやすく、時にユーモアを交えてお話をされました。

結核性腸炎の子ども。ネパールは大家族制で、食事をするのも、おじいさん、父親、男の兄弟という順に決まっております。お嫁さんは一番最後。栄養が行き届かず、結核になった母親から子どもへの感染が多いという。また、他の国と違い、女性のほうが癌にかかる率が高いのは、子宮癌が多いから。その理由は、結婚年齢が低く、多産であることと、水が貴重な為、お風呂に入れない不衛生さにあるとのことでした。働き手としてお嫁さんが欲しいので、早い結婚が望まれるという背景があります。石や土や水など重いものを運ぶのも若い女性の仕事です。53才と平均寿命が男性よりも短いのもネパールだけのことだというお話でした。

カースト制も依然として人々を苦しめていることに驚かされました。知珂子さんが最も心を痛められた光景は、少女が自分の奉公しているお屋敷の、同じ年頃の小学生のかばん持ちをして小学校の門までお供する光景でした。どんなに一緒に勉強をしたいだろうかと思われたそうで



約20名の参加者は、様々なサリーを着て参加。世話をすると約30名がネパールの衣装を着て爽やかな雰囲気会場に溢れていた。知珂子さんは、着付け、その衣装紹介と、普段の人々の生活紹介と大活躍。



熱弁で参加者を魅了する木村先生と会場の様子

す。女の子は、入学しても、5年生にもなるとその数は約3分の1に減ってしまうとのこと。貧しい家ではやはり女の子は勉強するより働き手にならざるを得ない現状のようです。

これらのお話を聞いて、女性の自立までの遠い遠い道のりを思ってしまう。でも、まず、この国の人々に知ってほしい。変わってほしい。

その為には、まず、女性達の、家庭そして社会での地位向上が必要です。私達がフェアトレードを通じて協力していく大切さを改めて感じました。

結核で亡くなる赤ちゃんがいなくなり、すべての女の子が学校に行けて、女性が人としての尊厳を認められることを願いつつ...

【木村雄二医師プロフィール】

1993年1月から、JOC Sネパール派遣ワーカーとして、ネパール合同ミッション(UMN)に加わり、パタン病院の病理医として7年に渡り働いてこられました。ネパールの病理学の発展とネパール人の病理医の育成に力を注ぎ、第2期の活動を終えて6月に帰国されました。

* JOC S「(社)日本キリスト教海外医療協力会」・・・1960年設立当初よりアジアの人々の自発的な努力を側面から支えることに活動の重点を置き、保健医療協力に従事しています。

【木村雄二医師との出会い】

木村先生、という思い出すが、1997年4月12日に、3年半に及ぶパタンUMN病院の第1回赴任を終えて帰国していた時のことです。ネパールのコーヒーを飲みたいと、ネパリー・バザールの事務所にネパールでの活動のスライドを持参して訪問して下さいました。

「女性のこの厳しい状況が変わって欲しい、女性の生活が変わらなければ、この国(ネパール)は変わらない」とのお話に、フェアトレードの視点と同じ共感を覚えました。その6月24日に再びネパールへ赴任。その間、私達のコーヒーを持参してパタンUMN病院へ伺ったこともありました。帰国後も、病院勤務のかたわら、後任の育成にあたるご予定で、常に「継続」を考えられているその真剣な姿勢には、感銘を受けるとともに、「継続」という(フェアトレードの)視点の大切さを強く感じさせられました。(完二)



「ネパールの人たちをもっと知るために」 ボランティアメンバーのネパール訪問

魚谷早苗、栗田利都子、高橋純子、長尾邦子、長尾美欧

8月9日～20日に、私たちボランティア5名は、代表の土屋春代とともにネパールを訪問しました。ネパリ・バザールで扱っているフェアトレード商品の生産者や支援している子どもたちを訪ね、多くの人々と様々な意見を交換し、密度の濃い充実した日々でした。

ネパールから日本へ向かう飛行機の中で書いた、興奮冷めやらぬ感想をご紹介します。

* 初めてのことが沢山あり、何もかもが新鮮で興味深いものだったと思います。話には聞いていても・・・百聞は一見にしかずって本当ですね。ダカ織りもスプーンもスタンプも本当に手のかかる職人芸だと思いました。話では理解しきれなかった現状や技術を理解できた貴重な旅、とても楽しかったです。言葉のブランクを無くして、またぜひ行きたいですね。

(美欧：初の海外旅行)

* ネパールは長い間(100年間位)の文盲といくら民主化されたとはいえ脈々と受け継がれてきた(?)カーストにはばまれて、産業を起すにも教育も資金もないという状態にあると感じた。更に、たとえ資金があったとしても貧しいカーストの人々が作ったものはあまり受け入れられないのではとすら思えた。これからのネパールの発展は、カースト制度の打破と教育、又それを人々に知らしめ、受け入れることに他ならない。カーストの上の人々にとって、それは受け入れがたく、又、口ではそうは言っても、認める(認められる)ことは不可能に近いだろう。それは今まで自分達が得ていた特権を放棄することにつながるであろうと思えるからである。(邦子：初のネパール)

* 旅を終え、今、一言では言い表せない程の衝撃を受けています。生産現場では、見覚えのある商品を作っている所を見て嬉しく思う反面、お祭りを見て宗教的に女性がどんな立場におかれているかを知り、憤りを感じました。夫の足元にかしづく妻の習慣。女性が夫や男兄弟の健康長寿を祈る祭りの話は聞いたものの、女性の健康長寿を祈る祭りの話は聞けませんでした。宗教的な男性優位の習慣、考えからも脱却しなければ彼女達の自立はないでしょう。時間のかかる、深い問題です。美しいダカ織りを織るその手を見つめながら、みんな少しでも教育を受けて欲しい、働く技術を身につけて欲しい、自分の力で強く生き抜いて欲しい、そう願わずにはいられませんでした。(利都子：初のネパール)

* “イギリス、アメリカ、日本、ネパール、どこの国でも女性の問題はただ一つ”ウーマンクラフトのシャンティさんの言葉が耳に残っています。“何人の男と寝ようが貧しい村の生活よりはまし”と小さな娘を売る親がいる。厳しい現実の中で女性達は自分達の足で立とうとしている。小さな仕事をおこし、手に職をつけて



サナのロヒニさん(左から4番目)、JACのアジツさん(左から5番目)を囲んで元気の皆さん
代表の土屋春代(右端)は、案内兼通訳として奔走

歩き出そうとしている。あなた達はどう考えますか。どうしたいですか。手厚いもてなしと熱いまなざしは私たちに問いかけている。ただ見てただけではすまされない!! 熱い7日間でした。(純子：3回目のネパール)

* これでネパール訪問は10回目。生産現場の写真を撮ったり、子ども達と交流してきましたが、今回大勢の仲間と意見を交わしながらの毎日は、新たな発見があり密度の濃い旅でした。また、現地で生産者との話し合いを重ねてきた春代さんと行動を共にできたことで、小さな生産者と密に関わり、個々にあった配慮をし、信頼関係を築き上げてきたネパリ・バザールの目指す道の一端が見えたと思います。(早苗：10回目のネパール)

訪問生産者

<フェアトレード関連>

サナ・ハスタカラ(小規模生産者のマーケティングを支援するフェアトレード団体) マハグティ(マハトマ・ガンディの思想を受け継ぐ歴史あるフェアトレード団体。女性たちが暮らすアシュラムも訪問) クンベシュワール技術学校(ニット製品) サヌ・パイさんの工房(スプーン&フォーク) ウーマンクラフト(紙製品) セラミック工房(お香立て) ウッタムさんの工房(ダカ織り) シディマンさんの工房(木彫りスタンプ) シターラさんの作業所(ネパールカレー・マサラ) コットンクラフト(バッグ、スリッパなど) マヌシ(絞り染めの布製品)

<教育・子ども関連>

公立校、私立校、モーニングスターチルドレンズホーム(40数名の子ども達を引き取り家族として育てているホーム) CWIN(子ども達の権利を守るためのNGO)

参加して下さい!

学習会の
様子は、
p 15 参照

11月12日の学習会の場で帰国報告をする予定です。初めて訪れてみた生産者の様子、子ども達や女性たちの暮らしの印象などご報告します。





海外の動き

「ネパール商品の事業促進」: ネバリ・バザーの活動紹介

昨年の10月15日に、「繁栄と持続」と題して、フェアトレードの役割と期待に関する記事がネパールの新聞、THE RISING NEPALに掲載され、ネバリ・バザーの活動の貢献について紹介されました。

今回、大手の新聞、The Kathmandu Post (英字:2000.9.1)とKantipur (ネパール語:2000.8.31)にネバリ・バザーの現地での活動が紹介されました。多くの援助がなされているにもかかわらず、なかなか生活は向上しない。特に、小生産者、小さな農民には行き届かない中、そのような点に着目しながら活動しているフェアトレードに焦点があたりました。

取材にあたった若いジャーナリストの見解は、「小生産者、小さな農民に貢献しているか否かが記事を取り上げる基準です」と、爽やかに、しかし情熱的に語ってくれました。



ネパール料理教室

～ネパールカレー大好評～

島津直子

7月23日に、毎年恒例となったネパール料理教室が開かれました。当日は定員を越える申し込みがあり、パンダナをきりりと締めた男性から、ご夫婦、お子さんを連れたお母さんまで、21名の方が参加して下さいました。

4つの班に分かれ、講師のマンディラさんの指導のもと、マサラ(数種類のスパイスのバック)を使ってのチキンカレー、ベジタブルカレー、ジャガイモのアチャール(和え物)、人参デザートに挑戦。レシピを片手に野菜を次々と切り、潰し、炒め、煮、スタッフもいつの間にかおしゃべりの輪に加わり、質問が飛び交い、チリのお好みの量を決めたりとにぎやかでした。

お料理教室でのお楽しみタイムは何といっても食べる時。気になるお味は??「おいしい!」の声があちこちから。

ここでネバリ・バザーの山下さんより「マサラは、ネパールの女性達がより良い品質の物をと開発した製品」と説明があり、おいしさの源に納得。又、マンディラさんより、ネパールの地形の話からカレーの意味など、質問も交えているいろいろお話を伺い、作って味わい、ネパールを知る楽しい一日となりました。



先生のマンディラさんを囲んで。左から2番目が直子さん。

マンディラ流チキンカレーの作り方

チキンカレーマサラのチリ以外を混ぜておく。

骨付き鶏モモ肉(800g)にマサラ半量と塩大1をまぶす。

フライパンに油大2を入れ、ざく切りにした人参(1本)、ジャガイモ(1個)を炒め、玉ねぎ(2個)を加える。

塩大1で味付けし、残りのマサラとざく切りトマト2個分を入れる。

深鍋に入れ湯400ccを加えて煮る。

フライパンに大1の油を入れ、鶏肉を炒め、鍋に移す。蓋をせず、とろ火で煮る。

好みの量のチリを入れて仕上げる。





学習会(9月)紹介

～チョコレート・ゲーム～

(チョコレートゲーム・レポート 藤本芳子)



9月の学習会では、フェアトレードについて考える「チョコレートゲーム」という開発教育教材を用いたワークショップを行ないました。スタッフの福田博とボランティア4名が数ヶ月前から英語の翻訳をし、さらに実施に向けての打ち合わせを重ねての学習会でした。

当日は初参加の方も含めて17名がそろい、にぎやかに実施されました。石川県や静岡県といった遠方から来てくださった方もいらっしゃいました。

英文の翻訳から取り組んでいますので、実際にやってみたらどうなるのか、直訳どおりの解釈でうまく行くのかどうか分からないので、担当したメンバーは手探りでの進行でしたが、1時間半ほどかけてゲームはスムーズに進み、終了後の感想も様々な視点から出され盛り上がりしました。

参加者のひとり、藤本芳子さんのレポートをご紹介します。

チョコレートゲーム・レポート 藤本芳子

私のグループは、ガーナのカカオプランテーションで働き3人の子供がいるという家族の設定でした。13才の息子は別の土地で水を売って暮らし、娘の1人は地主の家で働き、もう1人は職探し中。子どもを学校に行かせる事もできず、やっと家族が食べていけるという状態で、よほどの貧困家庭らしいということが分かりました。

一方で、同じガーナの家族でもイギリスと貿易をして、収入が桁違いのところもありました。

食料、住居、衣料、燃料、交通手段、余暇などの生活レベルを、収入に応じて家族自ら選択するのですが、高収入の他の家族が衛生的な水やおいしい食料を買い、車を所有しているのに、収入がわずかな私の家族は、汲んだ水を沸かして飲み、食料は栽培し、衣料は中古品、交通手段は徒歩、と切り詰めるしかありません。

ブラジルのカカオが不作で、ガーナのカカオの売上が増しましたが、地主の収入は増えても、私達家族の収入は

チョコレートゲームは、カカオの国際取引を題材にした開発教育教材で、イギリスのLeeds Development Education Centre が作成しました。参加者は9つのグループに分かれ、ガーナ・ベリーズ・ブラジル・イギリスでチョコレート産業に関わって暮らす家族を演じ、輸出用農作物の国際取引が各家族に与える影響の大きさや、金持ちを富ませ貧しい人をさらに貧しくする貿易システムの不正を体験します。最新版はフェアトレードを組み入れ、参加者は、自分らの消費行動を通して、より公正な貿易システムに貢献できることが理解できます。

対象：11歳以上成人まで
人数：18人から50名
所要時間：60～90分



ほんのわずかしかな増えません。

次に、カカオの市場価格が下落すると、地主は農地を縮小させる方針をとり、私達家族は解雇させられるかもしれないという不安な状態になり、「別の土地に住む息子の所に皆で行くしかない」と話していました。

他国でも収入数が多い家族と少ない家族の格差が出ていました。

このゲームは本邦初だったこともあり、企画・翻訳された方も苦勞の連続だったようですが、大国や地元有力者の意思一つで農民の暮らしが変わるといった自由貿易での南北問題の一端が分かり、大勢でこのゲームをしたら楽しいだろうし、フェアトレードに関心を持つ人が増えるだろうと思いました。

<参加者アンケートから>

- 国内の貧富の差、一部の権力者の影響力など色々な階層の生活が見えてよかった。
- 貿易ゲームのような国対国の比較ではなく、具体的家族の生活感があった。
- 外国の暮らしがイメージしづらいのでイラストや小道具など使うと良い。
- 様々な課題を盛り込んでいるので、フェアトレードの関連が分かりにくい。焦点を絞ってシンプルにしたほうが良い



ネパリ・バザールは、スタッフ、ボランティア合同で、フェアトレードを中心とした国際協力やネパールの状況について考える学習会を開いています。生産者訪問の報告、貿易ゲームなどのワークショップ、ネパールから招いた生産者を囲んでの座談会、日本国内での協力者である福祉作業所との交流会などを行なってきました。

ベルダでは、国際協力やフェアトレードについて共に考えていくために、また、協力の対象となっている国々の文化的すばらしさをご紹介しますために、様々なイベントを行なっています。

「一般公開イベント」

公開講座 マヌシの活動と草木染め

2月16・17日(金・土)

場所: あ～すぶらざ

PART : ネパールの草木染め紹介と、女性を視点とした活動紹介

PART : 意見交換
パネル展示、現地での活動の様子を紹介しながら、消費者、お店と生産者の連携に向けての話し合い、交流。

ゲストスピーカー:

マヌシの代表、パドマサナ・サキヤさん
(ネパール・フェアトレード・グループの一員)

「料理教室」12月17日(日)

11:00-14:30

場所: あ～すぶらざ

ネパール・カレー・マサラを使用して、美味しいカレー料理に挑戦しよう!



至大船 至横浜

本郷台駅

地球市民かながわ
プラザ2F
フェアトレードの
お店 ベルダ

TEL: 045-890-1447
FAX: 045-890-1448

あ～すぶらざ
(愛称)

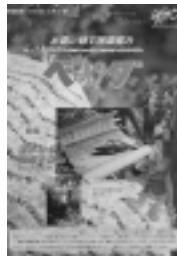
卸も全国的にしています!
お問合せ下さい。

「フェアトレード学習会 / ミーティングのご案内」

「ベルダ」では、楽しい勉強会を連続で行ない気軽に参加出来るものを予定しています。みなさまの参加をお待ちしています!

1月21日(日)「レプチャプロジェクト(民話集の作成と地域研究)」

2月18日(日)「マヌシの活動について、パドマサナさんより、その活動経緯、その情熱、今後について話し合いと交流をします」



国際理解にお役立て下さい。通信販売カタログ

ネパリ・バザールでは、ニュースレターの発行、フェアトレード関連の本の出版、市民の方々の国際交流、支援の理解を深める活動も行っています。また、フェアトレードの活動に広くご協力頂けるように、通信販売カタログを作成していますので、ご興味がある方はご請求下さい。

学校、教育機関へのフェアトレード商品の貸し出し、講演会、お話会など、開発教育のご協力も実施しています。お問合せ下さい。



ボランティア募集!

イベントのボランティアをはじめ、地域研究と絵本を作る分科会、織と染めの分科会、インターネット分科会など、様々なボランティアを募集しています。お気軽にお問い合わせください。

ネパリ・バザールのホームページ・・・

グループの設立からフェアトレードに関する情報紹介など分かり易く読めます。

ご覧になってご意見をメールでどうぞ!

<http://www.yk.rim.or.jp/~ngo/>

< 編集後記 >



・@ 涙ぐましいとも言えるコーヒーの現地調査報告や五感(六感も?)を駆使してのネパール初体験記、いかがでしたか? 私のも8年前の初めてネパールを訪れたときの、強烈な印象を思い出しました。4回目の訪問を狙っている(昌治)



・@ ネパール訪問から戻ったメンバーの表情は、みんな生き生きとしていて、どんなに楽しく、実のある旅であったかがよくわかります。この次にはきっと一緒に・・・の思いを強くしました(万知子)

・@ 最近、ほのぼのとした記事が少ない? 以前の「カトマンズ乗り物事情」のような記事が欲しいとの声もあります。そこで次号は、ネパール人女性、マンデラさんから、料理のコツ、気になること、等々書いてもらおうと相談中です!

皆様の感想、要望などありましたらお便り下さい。



・夏のネパールツアーは本当に刺激的でした。ボランティア仲間達の意外な素顔(?!)、訪問先で盛り上がる女性問題の話題、ホテルに戻ってから夜遅くまでの意見交換・・・今後こうした機会を設けていって、活動の力にしていきたいと思います。(早苗)



・@ 最近よく感じること、それは夢を語る女性が多いのに、夢を語る男性が少ないのでは? どう食べていくか、の前に、どう生きるか、でありたい。特集にやっとコーヒーを紹介できました。様々な人々に支えられてきたことを思い出します。生産者を訪ねての特集も、ネパリならではの人間関係があるからこそできる内容ですね。全体に難しい内容になってしまったので、楽しさも味わえるように工夫していきます。(完二)

発行所: ベルダレルネーヨ
ネパリ・バザール

247-0005 神奈川県横浜市栄区桂町274-15
第2中山ビル3階

Tel: 045(891)9939 Fax: 045(893)8254

<http://www.yk.rim.or.jp/~ngo/>

E-mail: nbazaro@a2.rimnet.ne.jp

2000年10月発行

発行責任者: 土屋完二

編集スタッフ: 太田昌治 魚谷早苗

土屋完二 矢島万知子

編集協力者: 他スタッフ一同